

指示詞の照応用法に関する日本語と中国語の対照研究

呉人恵・芦英順・加藤重広

1. はじめに

世界の479言語の指示詞体系を類型的に比較した吉田（1980）は、指示詞には1分型から14分型までであるが、このうち2分型が47.4%と最も多く、次に3分型が35.1%を占めるとしている。ちなみに、日本語は近称コ、中称ソ、遠称アの3分型であるのに対して、中国語は近称の「这」と遠称の「那」の2分型である。このことから、日本語の近称コは中国語の近称「这」に、日本語の遠称アは中国語の遠称「那」にそれぞれ対応しているのだろうか、あるいは、日本語の中称ソは中国語の「这」と「那」のどちらに対応しているのだろうかといった疑問が当然出てくる。

『中日交流標準日本語初級』（1988）、『日語入門』（1994）、『みんなの日本語』（1998）などの日本語の教科書ではいずれもコは「这」に、ソ・アは「那」に対応するとしているが、実際にどのように対応するのかはきわめて微妙で難しい問題を含んでいる。そこで、本稿では日中両言語における指示詞の主に照応用法について語用論的視点から比較対照することにより、このような対応関係に再検討を加える。

2. 日中両言語の指示詞の形態的分類

まず以下では、主に佐久間（1983）と江（1980）にもとづき、指示対象のタイプ別に日中両言語の指示詞の語形一覧をあげる。

表：日中両言語の指示詞の形態的分類

	日 本 語	中 国 語
も の	これ/それ/あれ（代名詞）	这/那，这个/那个（代名詞）
場 所	ここ/そこ/あそこ（代名詞）	这里/那里，这儿/那儿，这边儿/那边儿（代名詞）
方 向	こちら/そちら/あちら（代名詞） こっち/そっち/あっち（代名詞）	这边儿/那边儿（代名詞）
人	こいつ/そいつ/あいつ（代名詞）	这/那，这家伙/那家伙（代名詞）
性 状	こんな/そんな/あんな（形容動詞的） こんなに/そんなに/あんなに（副詞的）	这么/那么（副詞的） 这种/那种（形容詞的）

様 子	こう/そう/ああ（副詞的） こういう/そういう/ああいう（形容詞的）	这么/那么，这么着/那么着，这样/那样，这么样/那么样（副詞的）
指 定	この～/その～/あの～（連体詞） このような～/そのような～/あのような～（形容詞的） このように～/そのように～/あの～（副詞的）	这～（連体詞）

3. 日本語の照応現象

「照応」とは、一般に文中あるいは一貫性のある文連続の中の2つの言語形式が同一の対象を指示している場合の、その2つの言語形式の関係を意味するが、本稿では、照応用法とは単純に直示以外の用法を指すものとする。

ところで、照応用法は「文脈指示」とも呼ばれている。文脈指示は言語として書かれた文脈に関する指示だけを指すのではなく、文脈から推論できたもの、あるいは記憶的な文脈に関する指示も指している。

3.1. 先行研究

日本語の文脈指示「コ・ソ・ア」の使い分けに関する主たる先行研究としては次の4つが挙げられる。

3.1.1. 久野（1973）

3.1.1.1. 定義

久野（1973）は文脈指示において、ア系列は「その代名詞の実世界における指示対象を話し手、聞き手ともによく知っている場合」、ソ系列は「話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合」に用いられるとし、またコ系列について「その事物が目前にあるかのように生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として眼前指示代名詞的色彩が強いようである。話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない」としている。次の例（1）を見られたい。なお、以下であげる例文のうち、出典のないものは、日本語、中国語とも芦が作ったものである。日本語については呉人、加藤がネイティブ・チェックをしている。

(1) a: 昨日、山田さんに会いました。あの（*その）人、いつも元気ですね。

b: 本当にそうですね。 (久野 1973: 69)

すなわち、久野（1973）によれば、例（1a）は、話し手が文末に「ね」を用いて、山田さん

が元気なことについて聞き手の同意を求めていることから、聞き手が山田さんをよく知っていることが前提となっていることは明らかである。したがって、「山田さん」に対する文脈指示代名詞としては「あの¹人」が要求される。「あの」の代わりに「その」を用いると、山田さんを知らない聞き手に対して、山田の元気なことについての同意を求める、という矛盾が生じてしまう。

3.1.1.2. 問題点

日本語の文脈指示に関して、聞き手の知識を想定した久野の上述の理論は説得力があり、これまで日本語教育の中でも長らく影響力を持っていた。筆者も日本語学習者として、また日本語教育者として、久野の理論に依拠するところが大きかった。しかし、これに対する次のような反例が黒田（1979：101）によって指摘されている。

(2) 僕は大阪で山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくといい。

（黒田 1979：101）

(2) の場合、聞き手は山田太郎先生を知らないから、久野（1973）に従えば「その先生」とするべきところである。しかし実際には、指示されるところの山田太郎は聞き手が知っても知らなくても「あの先生」で指示することができるのである。

3.1.2. 黒田（1979）

3.1.2.1. 定義

黒田（1979：98）は次のように述べている。

ア系（及びコ系）の指示詞に対応する直接的な知識ということは、直接体験に基づく知識ということであろうが、これと対比して、ソ系の指示詞に対応する間接的な知識とは、一先ず、体験的知識に対比して、概念的知識と規定したい。

さらに、黒田（1979：97）はこれを裏付ける次のような例を示している。

何かを執筆することを頼まれて、それに応じようか応じまいかと迷っていたとする。その時あることが心に浮かんで、「うん、まあ、そのことでも書いてみるか」と考える。同じような状況のもとで、「うん、まあ、あのことでも書いてみるか」と考えることも可能であり、このような場合のソとアの使い分けは微妙であるが、筆者の感じで、二つの特例を挙

げてみると、まず、ある事柄が心の中にあるがまだそれが果してどのような事であるかよくは分からない、しかしその題目がどのように発展するかは確かでないにしても、そのことについて書いてみることにして少し考えてみれば、考えもまとまって来るであろう、といったような場合には、

「そのことでも書いてみようか」

ということになり、他方、ある特定のはっきりした情況、思い出などが心の中にあるような場合、例えば、ハワイ、カワイ島のカララウの絶壁、視野は一带白霧に覆われ眼前30米先も見定め難いと思いきや、一瞬裂けるが如く開かれた霧の間足下数千尺の下に寄せる白浪を見る、といった情況を思い起こしたときには、

「そうだ、あのことを書いてみよう」

ということになる。

この説明は感覚的で理論的分析にそのまま取り込むことは難しいが、要約すれば明確な対象として思い起こしたときにはア系、まだ想念として明確な形をとっていないければソ系を用いて指示するのだと理解することができるだろう。

3. 1. 2. 2. 問題点

日本語の文脈指示の使い分けは聞き手と話し手の知識によるものではなく、話し手の知識に存在する対象の捉え方の違いによるものであるとする黒田の説は説得力があるが、しかし、それでもうまく説明できない例がある。(3)を見られたい。

(3) 沖縄に行きたいな。あそこは食べ物おいしいらしいね。

話し手は文末に「らしい」を用いて推測を表しており、これにより話し手が沖縄に行ったことがないことは明らかである。したがって、黒田によれば直接的な知識ではなく間接的な知識、すなわち概念的な知識であるから、「そこ」となるべきところである。しかし、実際には、指示されるところの沖縄は、たとえ行ったことがなくても「あそこ」で指示できるのである。

3. 1. 3. 田窪・金水

3. 1. 3. 1. 定義

田窪・金水(2000:263)は、ア系列はD・領域に、ソ系列はI・領域に収まる情報を指示している。D・領域とは、長期記憶内のすでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される領域であり、I・領域とは、

まだ検証されていない情報, すなわち, 推論, 伝聞などで間接的に得られた情報, 仮定などで仮想的に設定される情報とリンクされる領域であるとされている。

- (4) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが, 君もあの先生につくといいよ。

(金水・田窪 1990:130)

- (5) a: 先生が学生だった時には, どのように勉強されたのですか。

b: あの頃は本がなくて, 本当に苦労しました。(金水・田窪 1990:130)

(4) は直接体験に基づく「教示」の文脈であり, (5) はやはり直接体験に基づく「語り」の文脈である。このような文脈では, アがかなり自由に使えることが指摘されている。

3.1.3.2. 問題点

黒田説同様に田窪・金水 (2000) の説も, 日本語の文脈指示の使い分けが話し手の知識に存在する対象の捉え方の違いによるものであるとするものであるが, ここでもこれではうまく説明できない例が出てくる。

- (6) 富山には, 白海老というのがあるそうだけど, あれは高価なものらしいね。

- (7) 富山には「立山」というお酒があるらしいね。あのお酒はどこで買えるかな。

(6) (7) では, 文末に「そうだ」「らしい」を用いて伝聞, 推論を表している。田窪・金水 (2000:263) に従えば, 伝聞や推論は I-領域に属しているからソ系列指示詞によって指示すべきところである。しかし, 実際にはこのようにア系列指示詞を使うことも可能なのである。

3.1.4. 堤 (2002)

3.1.4.1. 定義

堤 (2002:53) は「場」の中に2つの心的世界を設け, それぞれを W_s , W_p , 「場面」に相当する外的世界を W_o としたうえで以下の枠組みを提案している。

A: W_s は話者が外界や文脈から構築する世界である。($W_s \neq W_o$)

B: W_p は W_s と W_o との中間的な存在である。

C: W_p 内の要素を介して W_s 内の要素を指示することを間接指示といい, W_p 内の要素を介さずに W_s 内の要素を指示することを直接指示という。

D: W_p 内の要素は全て変項である。 W_s 内の要素は全て変項ではない。

E： 意味解釈は、 W_s 、 W_p 内の要素のいずれかを用いてなされる。

F： W_s 内から意味解釈に選出される要素を指示的、 W_p 内から選出される要素を非指示的と呼ぶ。

これをわかりやすく図示すると以下のようになる。

$W_0 \rightarrow W_S$	直接指示	指示的
$W_0 \rightarrow W_P \rightarrow W_S$	間接指示	
$W_0 \rightarrow W_P$		非指示的

a (直接指示 \wedge 指示的) \rightarrow コノ／＊ソノ

b (間接指示 \wedge 指示的) \rightarrow コノ／ソノ

c (間接指示 \wedge 非指示的) \rightarrow ＊コノ／ソノ

(8) 後樂園を破壊して、そこにビルを建てよう。 (堤 2002:61)

(9) モナリザを偽造して、それ/そいつを売り飛ばそう。 (堤 2002:61)

(8)において「そこ」が指しているものは、先行名詞「後樂園」そのものではない。同様に(9)の「それ/そいつ」が指すものも「モナリザ」そのものではない。一見、先行名詞と同一の指示対象を指すようにみえる「それ」は、実は先行名詞そのものを指しているのではなく、先行詞を含む補文構造を指している。補文構造は当然ながら固有名詞とは解釈されえず、むしろ不特定の「場所・もの」と解釈されるため W_p に登録されるようになる。

3.1.4.2. 問題点

堤 (2002:59) があげている別の例を見てみよう。

(10) 後樂園に行ってそこで弁当を食べよう。 (堤 2002:59)

(11) モナリザを盗んでそれを売り飛ばそう。 (堤 2002:59)

堤 (2002) によれば、これらの指示代名詞は「後樂園／モナリザ」という先行名詞を指しているのではなく、「後樂園である場所／モナリザであるもの」というような先行文脈を一種の補文として受けている。したがって、補文構造は当然ながら固有名詞とは解釈されえず、むしろ不特定の「場所／もの」と解釈されるため、 W_p に登録されるようになる。

このように堤の説明に従えば、すべての先行文脈が補文になる。しかし、筆者は補文と非補文を区別し、(8)と(9)の先行文脈は補文であるが、(10)と(11)の先行文脈は同一指示名詞であ

ると解釈する。

ところが、次のような例は堤の枠組みでは説明できない。

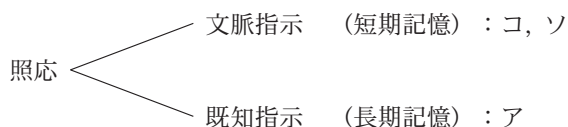
(12) 富山大学附属図書館は人文学部の北側にあります。そこに行って本を借りなさい。

(13) 6月16日にまた会えますから、その時、話し合しましょう。

堤に従えば上述の a に当てはまるこの2例のような場合には、コしか使えない。すなわち、 W_P を介さずに直接 W_S に指示対象が登録される場合である。(12)の「富山大学附属図書館」、(13)の「6月16日」は特定された対象、すなわち固有名詞に相当する指示対象であるから、コが使われるべきところである。にもかかわらず、ここではソしか使えない。したがって、これを説明するための別の枠組みを考えなければならないことになる。

3.2. モデル化

筆者は、日本語の指示詞の照応用法は次の2種類に分類されると考える。



指示詞の照応用法が直示以外の用法を指すことはすでに述べたとおりであるが、この照応はさらに文脈指示と既知指示に分けられると考えられる。文脈指示とは言語的先行文脈がある照応を指している。一方、既知指示とは言語的先行文脈がないか、あっても先行文脈を指していない場合の照応を指している。

筆者は、黒田 (1979:98) と田窪・金水 (1996:263) によって提案された日本語の文脈指示の使い分けは聞き手と話し手の知識によるものではなく、話し手の知識に存在する対象の捉え方の違いによるとする考え方は支持しつつ、日本語の照応用法のコ・ソ・アの使い分けについて次のように考えたい。すなわち、先行詞そのもの、あるいは先行詞から活性化された情報、すなわち、概念的知識を指示している場合はソを用いる。すなわち短期記憶である。言葉を介した伝達が行われている場でやりとりしているうちに得た知識を短期記憶 (short-term memory) と呼ぶが、相手が言ったことだけでなく、自分が言ったこともこの短期記憶に収蔵されると考えられる。一方、長期記憶の中の情報を指示している場合はアを用いる。長期記憶 (long-term memory) とは、会話が始まる前にもうすでに持っている知識のことである。既知指示の照応においては、指示対象が具体的に実在するというより、頭の中に概念として存在

し、それを指示する。頭の中に概念として存在するということは、世の中に関する知識として知っているということとおおよそ同じであり、この場合の知識は一時的なものではなく、長期にわたって保存されている知識で、頭の中にある知識や情報の貯蔵庫にずっと（忘れてもしないかぎり永久に）保存されていると見なされる。このような知識を長期記憶と呼ぶのである（加藤 2004:146）。さらに、直示のように目の前にあるかのように生き生きと叙述する場合はコを用いる。コは直示性のある照応であるといえる。すなわち、文脈指示はコとソであり、既知指示はアである。

3.3. データの分析

3.3.1. コ・ソ・アの基本的な使い方

まず文脈指示のコは、直示のように目の前にあるかのように生き生きと叙述する場合に用いられる。以下の例を見られたい。

- (14) いったい戦争はなんのためにするものかわからない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される。物価は高くなる。こんなばかげたものはない。

（漱石『三四郎』）

- (15) 羊皮、牛皮、二百年前の紙、それからすべての上に積もった塵がある。この塵は二、三十年かかってようやく積もった尊い塵である。

（漱石『三四郎』）

(14)(15) のコは、それぞれ先行文脈「景気もよくなればだが大事な子は殺される、物価は高くなる」「羊皮、牛皮、二百年前の紙の上に積もった」を指している。(14) はおじいさんが直接に自分の子が殺され、不景気で物価が高くなったことを体験しているために、直示性を持っている。(15) の「塵」は目の前にあるかのように生き生きしているからコを用いる。

これらのコはいずれもソで置き換えることが可能であるが、ソで置き換えてしまうと、淡々とした叙述となり、客観的に感情や判断を交えずに述べているような印象を与えることになる。ソを用いた場合の効果と比較すると、コはあたかも目の前にあるかのごとく生き生きとした叙述を行っている印象があり、その点でやや直示の特性を残しているとも見ることもできる。

- (16) 頭には高等学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。

（漱石『三四郎』）

- (17) 卵1個と牛乳1カップを小麦粉に入れてかき混ぜよ。それを熱したフライパンに注げ。

（吉本 1986:109）

(16) の「そこ」は、先行文脈「三四郎のかぶっている夏帽から徽章をもぎ取ったところ」を指している。この例は先行文脈の情報を指している。すなわち概念的知識であるからソが適当である。

(17) の照応詞「それ」の先行詞は卵、牛乳、小麦粉ではなく、それらをまぜあわせたものである。しかし、そのもの自体は先行詞として出現していない。推論の結果、そうしたものがあるはずだと考え、それを先行詞としているのである。

このような照応は、照応詞が現れるまでの言語的文脈の情報から連想的に先行詞に相当する内容を理解するということで「連想照応」と呼ばれる（加藤 2004：173）。

連想照応も先行詞から活性化された情報だから概念的知識に属している。従ってソが正しい。

(18) 熊笹の中を水ぎわへおりて、例の椎の木の所まで来て、またしゃがんだ。あの女がもう一ぺん通ればいいくらいに考えて、たびたび丘の上をながめたが、丘の上には影もしなかった。三四郎はそれが当然だと考えた。（漱石『三四郎』）

(19) 与次郎：「その代わり西洋は写真で研究している。パリの凱旋門だの、ロンドンの議事堂だの、たくさん持っている。あの写真で日本を律するんだからたまらない。」（漱石『三四郎』）

(18) では「あの」の指示対象は先行文脈には現れていない。「あの」は小説のずっと前の部分で出てきた椎の木のところで会った女を指しており、この情報はすでに読者の頭の中に収められている。すなわち長期記憶に収められていると見なされる。したがってアを用いるのが適当なのである。

(19) の「あの」は一見、先行文脈「西洋の写真、パリの凱旋門だの、ロンドンの議事堂」を指しているように見えるが、実は与次郎は前もってこの写真を見ていたため、会話が始まる前にすでにこの情報について分かっていたということからアを用いているのである。

情報の検索の「きっかけ」となるものを「トリガー (trigger)」ということがある。これを用いて説明すると、相手の発話に出てきた情報であるためソ系を照応で使えるが、それをそのまま指示せずにトリガーとして自分の長期記憶をさぐって情報があることを示すのが (19) であり、(18) はトリガーになる情報が示されないままに長期記憶から情報を引き出しているということがいえる。

3.3.2. コ・ソ・アの置き換えによる談話効果

指示詞の照応現象のなかで同じ文脈において、コ・ソ・アのうちの1つだけが用いられうる場合とコ・ソ・アのいずれもが用いられうる場合とがある。このような置き換えができるもの

について以下では具体的に見てみる。

(20) 昨日、駅で田中さんに会ったよ。{*この・*その・あの} 人、子供を産んだのに、やっぱり、スマートできれいだったよ。

(21) 田中花子という言語学者がいるけど、{この・その・あの} 先生は、お年なのにくさん研究発表をしているんだ。

(20) はアのみが適切である。ソは使えそうだが使えない。ここでは、前の文脈を指示しているのではない。話者は発話の時点ですでに過去のこととなっている昨日のできごとについて語っており、これは言わなければ長期記憶にしまわれてしまう情報である。後続文は昨日のことを思い出して言っているから一貫性が働くため、アのみが相応しいのである。すなわち、田中さんに会ったのは過去のできごとだから長期記憶を参照しており、したがってアを使わなければならない。後続文は過去のことだから、一貫した叙述とするためにアを使わなければならない。ここで、照応用法のコとソを使うと一貫性が崩れるので不適切となる。

一方、(21) は、コ系・ソ系・ア系のいずれを使うこともできる。ア系は長期記憶の情報を参照しているので、既知指示である。コ系は、まるでその場で指さして「この人」といつているかのような強く鮮明な指示で、直示性の強い照応である。ソ系は中性で無標であり、単に前の先行文脈「田中花子という言語学者」を指している。このような違いが、「その人」では淡々と冷静に語る印象、「この人」ではいきいきとした叙述をしている印象という違いを生み出していると考えられる。

4. 中国語の照応現象

4.1. 先行研究

中国語の文脈指示「这，那」の使い分けに関する先行研究としては次の4つが挙げられる。

4.1.1. 江 (1980)

江 (1980 : 81) は「这，那」の使い分けに関して次のように述べている。

「这」主要是用来指示身边不远的，或刚发生的，或刚刚说过的事物；有时用来强调不是别的事物。「那」主要是用来指出不在身边的，或以前发生的事物的某项特点。

(「这」は主として身のまわりから遠くない、あるいは今発生したばかりの、または言っただけの事物を指示するのに用いる。時には他のものではないことを強調するのに用い

る。「那」は主として身のまわりでない、あるいは以前発生した事物を指示するのに用いる。時にはある事物のある特性を強調するのに用いる。)

4. 1. 2. 梁 (1986)

梁 (1986 : 14) では次のように述べられている。

(a) 「这」は空間的、時間的に話し手に近いもの、また、空間的、時間的に話し手から一定の距離にあっても、聞き手にもよく知られ、精神的に近いと感じられるものを指示するのに用いる。

(b) 「那」は空間的、時間的に話し手から離れたもの、しかも聞き手がまだ知らないものを指示するのに用いる。

(c) ただし、空間的、時間的に話し手から離れたものを指す場合、その指示対象の存在する場所と発生する時間の客観性が強調されるとき、聞き手が知っているものであっても、「这」で指すことができない。

4. 1. 3. 林 (1987)

林 (1987 : 77) では次のように述べられている。

性状、方式、行項、程度、数量等总是附丽于事物的，这些事物如近在身边，或是刚刚说过，或是新近才有的用“这”，相反的，这些事物不在身边或以前有过的用“那”。

(性質と状態、方式、行動、程度、数量などは事物に付属している。これらの事物が身のまわりから遠くない、あるいは今発生したばかり、あるいは言っただけ、または最近できたばかりのものである場合は「这」、逆に、これらの事物が身のまわりでない、あるいは以前発生したものである場合は「那」を用いる。)

4. 1. 4. 讀井 (1988)

讀井 (1988 : 10) では次のように述べられている。

原則Ⅱ：話し手（作者）の視点が伝達の重要なポイントではないという前提のもとで、指示代名詞の先行詞が話し手（作者）によって提示されたばかりである時には“这”をつかい、比較的以前すでに聞き手（読者）に紹介されている場合には“那”を使わなければならない。

原則Ⅲ：先行詞が提示されたばかりであっても、Topic としての主語が甲から乙にかわる場合には"这"ではなく、"那"を使わなければならない。

原則Ⅳ：話し手の視点が伝達の重要なポイントであるという前提のもとでは、先行詞が提示されたばかりであっても、その先行詞の示す指示対象の存在位置が話し手の時間的・空間的視点と一致しない場合、"这"ではなく、"那"を使わなければならない。

4.2. 問題点

江（1980：81）、讃井（1988：10）、林（1987：77）は共通して、「这」は基本的には「言ったばかり」あるいは「提示されたばかり」の事物を提示するのに用いられ、「那」は「今、身の回りにない」あるいは「以前に発生した」事物を指示するのに用いられるとしている。しかし、この区別にしたがえば「这」で指示するべきであるのに、実際には「那」によって指示されている例が数多く見られる。

(22) 偶尔延长到八点的时候也不是没有的，但那是例外中的例外。

（たまには、8時までかかることもないではないが、それは例外の例外なのだ。）

ここで、「那」が指示しているのは、前文で提示されたばかりの「延长到五点的时候」のことである。従って、「言ったばかり」あるいは「提示したばかり」の事物であるかどうかは、ここでは「这」と「那」の使い分けの基準として必ずしも適切ではないといわざるをえない。

さらに (22) の「那」は (23) のように、「这」に置き換えることも可能であるが、どうしてもこのように「那」を「这」に置き換えることができるのか、置き換えることによってどのような意味の違いが生まれるのかについては上述の先行研究では説明することができない。

(23) 偶尔延长到八点的时候也不是没有的，但这是例外中的例外。

（たまには、8時までかかることもないではないが、これは例外の例外なのだ。）

また、(24) (25) で見るように話し手の視点が指示対象の存在と時間的、空間的に一致しない場合、「那」のみならず「这」も用いられる。これは讃井の原則Ⅳでは説明できない。

(24) 祖国宝岛台湾省的东南海滨有个台东县。那里坐落着一片片高山族的农寨渔村。

（我が祖国の宝島台湾の東南の海岸に台東県がある。そこには高山族の農民漁民の部落がたくさん点在している。）（讃井 1988：14）

(25) 祖国宝岛台湾省的东南海滨有个台东县。这里坐落着一片片高山族的农寨渔村。

（我が祖国の宝島台湾の東南の海岸に台東県がある。ここには高山族の農民漁民の部落がたくさん点在している。）

次に梁（1986）の説を検討する。（26）のような場合、聞き手は「那件事」について知っているから、梁（1986）に従えば、「这」を使うべきところである。しかし、実際には指示される場所の「那件事」は聞き手が知っていても「那」でしか指示できない。

（26） 那件事办得怎么样了？

（あの件はどうなってますか）

以上のことから、指示された対象が「言ったばかりの事物」であるか「比較的以前に言った事物」であるか、あるいはその場に「ある」か「ない」、または「話し手の時間的、空間的視点と一致するかどうか」というのは「这」と「那」の文脈指示の使い分けを規定するには不十分であることがわかる。よって、従来の研究では、「这」と「那」が文脈指示において本来どのように使い分けられているのか、さらに、「这」と「那」が相互に置き換えられるのはどのような状況において可能なのかという点について、十分に納得のいく説明が与えられていないと言わざるを得ない。

4.3. モデル化

筆者は、中国語の照応用法における「这」と「那」の使い分けについて次のように考える。先行詞そのもの、あるいは先行詞から活性化された情報、すなわち、概念的知識を指示している場合、言い換えれば短期記憶に収めてある情報の場合には「这」を用いる。これに対して、長期記憶の中の情報を指示している場合には「那」を用いる。しかし、長期記憶の中にある情報であっても、直示のように目の前にあるかのように生き生きと叙述しようとする場合には「这」を用いる。すなわち、文脈指示は「这」であり、既知指示は「那」である。また、前述した「这」と「那」の置き換えは、話し手がある談話効果を加えるためであり、これらの効果は「这」と「那」の意味的性格の違いを作るものであると考えられる。

4.4. データの分析

4.4.1. 「这」と「那」の基本的な使い方

次は、通常の文脈指示において「这」が用いられる典型的な例である。

（27） 有喜有忧，有笑有泪，有花有实，有香油色，既须劳动又长见识，这就是养花的乐趣。

（喜びもあれば憂いもある，笑いもあれば涙もある，花もあれば実もある，香りもあれば色もある。身体の運動にもなるし，知識も増える。これこそが花作りの楽しみというものだ。）
（刘他 1996）

（27）で「这」は先行詞そのもの，すなわち，「有喜有忧，有笑有泪，有花有实，有香油色，既须劳动又长见识」を指している。これは，発話の場で得られた短期記憶に納められている情報である。したがって，「这」が使われている。ちなみに望月（1974）は中国現代文における指示詞は少なくとも2倍の比率で「这」系が「那」系より多用されると指摘しているが，これは中国語の指示詞の照応現象は主に短期記憶を優先し，重要視しているためであると考えることができよう。

次は，通常の文脈指示において，「那」が用いられる典型的な例である。

（28） 是个夏天的日子，我坐在公园里看书，那本书真有趣，我看得着了迷，不觉已到了傍晚。

（ある夏の日のこと，私は公園で本を読んでいた。その本は本当に面白く，夢中になって読みふけているうちに，いつのまにか夕暮れになっていた。）（讀井 1988：15）

（29） 可是师父只要略微一听到你的名字，脾气可就坏透啦，马上就上楼，到那间黑屋子里去。

（でも先生は君の名前が一寸でも出た後は，そりゃご機嫌が悪いの。二階へお上がりになるのよ，すぐ，あの暗い部屋へ。）

（28）では，「那」は「ある夏の日に，公園で読んだ本」を指しているようだが，実はこの情報は前にもう分かっていたことである。作者はそのことを思い出しながら話しており，これは長期記憶に属していると考えられるため，「那」が使えると説明できる。

一方，（29）では先行詞が現れていない。「那」は読者と作者，あるいは話し手と聞き手が了解している情報で，すでに両者の長期記憶に収めてある。指示対象が具体的に実在するというより，頭の中に概念として存在し，それを指示しているために「那」が用いられると考えられる。

4. 4. 2. 「这」と「那」の置き換えによる談話効果

中国語の照応においては，同じ文脈で「这」と「那」のいずれもが用いられる場合がある。このように置き換えができるものについては，話し手が指示対象を短期記憶の中の情報として取り扱う場合には「这」を用い，話し手が指示対象を長期記憶の情報から取り出した場合には「那」を用いるということができる。そのいずれかを決めるのは話し手自身である。優先するかどうか話し手自身の判断にまかされている。話し手が指示対象にかかわりを持ちたくない

思い、感情的に遠ざけるようとする気持ちで突き放して扱う場合、あるいは、相手が導入した先行詞の場合には、指示対象となる情報はまだ相手のなわばりにある情報であり、自分があまり近付けたくないと感じる場合には「那」を使う。逆に話し手が指示対象を自分とかかわりの強いものとして、主観的に扱う場合は「这」を使うのである。

(30) 1949年10月1日，中华人民共和国成立了，从 {这・那} 一天起中国人民从此站起来了。

(1949年10月1日，中華人民共和国が成立した。その日から中国人民は立ち上がった。)

(梁 1986 : 14)

(31) 是个夏天的日子，我坐在公园里看书，{这・那} 本书真有趣，我看得着了迷，不觉已到了傍晚。

(ある夏の日のこと，私は公園で本を読んでいた。その本は本当に面白く，夢中になって読みふけっているうちに，いつのまにか夕暮れになっていた。)

(=28)

上の (30) と (31) では「这」系と「那」系のいずれを使うことも可能である。「那」系は長期記憶の情報を参照しているので既知指示であり。「这」系は前の先行詞「1949年10月1日」と「ある夏の日，公園で読んだ本」を指しているので，短期記憶の中の情報で文脈指示であるという違いがある。

5. 日中両言語の指示詞の対照

この章では，日本語と中国語の指示詞を個々に対応させて，どのような用法上の共通点と差異があり，またその対応関係をどのように捉えればよいかを考えていく。以下ではまず，対応関係ごとに用例を先に掲げ，そのあとに個々に考察を加える。

5.1. コー这

(32) 女とは京都からの相乗りである。乗った時から三四郎の目についた。第一色が黒い。

三四郎は九州から山陽線に移って，だんだん京大阪へ近づいて来るうちに，女の色が次第に白くなるのでいつのまにか故郷を遠くのような哀れを感じていた。それでこの女が車室にはいつて来た時は，なんとなく異性の味方を得た心持ちがした。

(这女子是从京都上东的。她一上来就引起三四郎的注意。她给人的第一个印象是皮肤黝黑。三四郎从九州转乘山阳线火车，渐渐接近京都，大阪的当儿，他看到女子的肤色次第变得白皙起来，自己不知不觉地产生了原理故乡的哀愁。因此，这个女子一走进车厢，他心里就想到，这回有了一位异性的同伴了。)

(漱石 『三四郎』)

- (33) 自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとうあっちで死んでしまった。いったい戦争はなんのためにするものかわからない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんなばかげたものはない。

(他还提到自己的儿子在战争中也拉去当兵，终于死在那边了。他不懂为啥要打仗，打完仗日子能好过些倒也罢了，可是自己的宝贝儿子死了，物价也涨了。还有比这更蠢的事情吗？)

(漱石 『三四郎』)

- (34) 頭には高校学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。うしろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かった。

(他头上戴着高中学生的夏帽，只是把帽徽摘掉了，作为毕业的标志，白天看上去，那地方还留有新鲜的印记。女子跟在后面，三四郎戴着这顶帽子总有些不大自在，然而他也无法可想。)

(漱石 『三四郎』)

(32)では、「コ」は先行文脈「京都からの相乗りで、乗った時から三四郎の目についた黒い女」を、(33)では、「コ」は先行文脈「あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる」を、(34)では、「コ」は先行文脈「頭には高校学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい」をそれぞれ指している。これらの「コ」は目の前にあるかのように生き生きと叙述する直示性の強い照応である。直示性の強い照応は先行文脈で詳細に描写された先行文脈を要求する。したがって、「コ」もある意味では短期記憶に属していると考えられることもできる。したがって、中国語に訳すときは短期記憶の「这」を使う。言い換えると、中国語の「这」は直示性の強い「コ」の用法に対応するといえる。

5.2. コー那

- (35) 三歳のルリ子一人だけが、このうす暗い林の向こうの川原で、何者かに殺されたということが憐れで耐えられなかった。

(三歳の琉璃子，孤零零地在那昏暗的树林对面的河滩上被人杀害了，多么可怜啊！)

(三浦綾子 『氷点』)

(35)では通常、「コ」ではなく「ア」を使うべきところであろう。照応詞の前には先行文脈がないが、ここでは三歳のルリ子が殺された暗い森をさしている。そのことはすでに読者の長期記憶の中に収まっている。しかし、作家が「ア」を使わずに「コ」を用いたのは、文学的な

色彩を強め、それによって特定の表現効果を高めるためである。すなわち、「コ」を用いると、主人公の視点からの叙述であることが強く感じられ、読み手は主人公に感情移入していく可能性が強い。しかし、中国語に訳すときには、このような点は考慮に入れられず、本来の機能と条件を考えて、長期記憶「ア」と対応している「那」に訳したのである。

5.3. ソー这

- (36) 横に照りつける日を半分背中に受けて、三四郎は左の森の中へはいった。その森も同じ夕日を半分背中に受けている。黒ずんだ青い葉と葉のあいだは染めたように赤い。

(三四郎用半个身子承受着夕阳的照射，走进了左边的树林。这座树林也有一半经受着一个太阳的光芒的考验，郁郁苍苍的枝叶之间，象浸染着一层红色。)

(漱石『三四郎』)

- (37) はなやかな色のなかに、白い薄を染め抜いた帯が見える。頭にも真っ白な薔薇を一つさしている。その薔薇が椎の木陰の下、黒い髪の毛なかできわだって光っていた。

(透过绚丽的色彩，他看到那女子束着一条染有白色芒草花纹的腰带，头上簪着一朵雪白的蔷薇花。这朵蔷薇花在椎树荫下，衬着乌黑的头头，格外光艳夺目。)

(漱石『三四郎』)

- (38) 「ちょっと伺いますが……」と言う声が白い歯のあいだから出た。きりりとしている。しかし鷹揚である。ただ夏のさかりに椎の実がなっているかと人に聞きそうには思われなかった。三四郎はそんな事に気のつく余裕はない。

(“请问……”声音从洁白的齿缝发出，语调急迫，但明朗而清晰。好比是在盛夏的当儿，向人询问椎树是否结了果实。这当然是明知故问。不过三四郎却无暇考虑到这一点。)

(漱石『三四郎』)

(36) では、「ソ」は「左の森」を、(37) では、「ソ」は「頭にさしている真っ白な薔薇」を、(38) では、「ソ」は「ただ夏のさかりに椎の実がなっているか」をそれぞれ指している。日本語のソ系は短期記憶の中の情報を指示する。先行詞そのもの、あるいは先行詞から活性化された情報、すなわち概念的知識を指示している場合はソを用いる。中国語の「这」系も短期記憶の中の情報を指示している。したがって、このような無標の標準的な用法においては、単純にソ系と「这」系は対応していると考えてよい。

5.4. ソー那

- (39) "张阿新另外同两个人一路走不多远，她们就分开了。走了三条路。" "两个是不是厂里人？叫什么？"

(「張阿新はほかの二人といっしょに行きましたが、いくらもあるかないかのうちに分かれて、三方へ散って行きました。」「その二人も工場のものなのかね？なんという名前だ？」)

話し手が指示対象にかかわりを持ちたいと思わず、感情的に遠ざけようとする気持ちで突き放して扱う場合は「那」を使う。また相手が導入した先行詞の場合、まだ相手のなわばりにある情報であり、自分に対象をあまり近づけたくない場合は「那」を使う。(39)は相手のなわばりにある情報であり、自分はあまり近づけたくない場合であるため「那」を使っていると考えられる。

- (40) 图书馆在人文部²的正面，请到那里借书。

(図書館は人文学部の真正面にありますから、そちらで本を借りてください。)

- (41) 图书馆在人文部²的正面，我有时也在那里借书。

(図書館は人文学部の真正面にありまして、私もあちらで本を借りたことがあります。)

(40) と (41) では、図書館は目の前にないから直示ではなくて照応である。空間的、時間的に話し手の指示の現場から離れている過去や未来という時間あるいは話し手から離れている場所である場合には中国語では「那」を使う。(40) と (41) の図書館は話し手のいる場所から離れたところにあり、話し手は長期記憶の情報から取り出しているから「那」を使っている。しかし、日本語の場合には、(40) ではソ、(41) ではアを用いている。中国語は話し手の知識のあり方に基づいて、聞き手の知識は考慮しない。これに対して、日本語は聞き手の知識を考慮した上で指示を行わなければならないという制約が別のレベルでかかると考えられる。(40) では後続文が未来を表しているから、長期記憶内の情報を思い起こした結果得られた情報として標示しないほうが望ましく、これとの一貫性を保つためにソを用いている。つまり、聞き手が知らないと考えられる情報を想起によって得られた情報としてマークしてしまうと、不必要に聞き手の世界知識の欠落を明らかにしてしまうことになりかねず、(40) は相手の立場を考慮しているからソを用いているのだと言うこともできるだろう。一方、(41) は話し手自身が使った図書館で個人的な知識から過去の経験を思い出しているため、長期記憶を参照しないと矛盾するからアを用いなければならない。

(42) 下周三开教授会, 那时我们再商量吧。

(来週の水曜日に教授会を開きますから, その時, また相談しましょう。)

一方, (42) は時間的に未来のことについて述べているので, 「那」を使っている。話し手のいる時間, 空間は「这」を使う。一方, 日本語では未来のことについて述べているので, 長期記憶のアは使えない。また現時点ではないからコも使えない。

5.5. ア—那

(43) ぼくはふと, 城山のアジサイのことを思い出した。あれから二回は咲いたはずだけれど, まだ二人で見にいったことはなかった。

(我蓦然想起城山の绣球花。那以来应该开了两次了, 可两人还没去看过。)

(片山恭一『世界の中心で愛をさけぶ』)

(44) 「おまえならきっと, こういうことをわかってくれると思って, わしは朔が大きくなるのを待っていたんだ」やはり鰻重に釣られたあの夜から, すべてははじまったのだ。

(“若是你, 我想一定理解这种作法, 我一直等你长大来着。”原来一切从吃鰻鱼饭那天夜里就开始了。)

(片山恭一『世界の中心で愛をさけぶ』)

(45) 「あの件はどうだった。」

(那件事怎么样了?)

日本語のア系は長期記憶の中の情報を指示している。中国語の「那」系も長期記憶の中の情報を指示している。上の (43) (44) (45) のアはすべて長期記憶に収まっている情報を指示しており既知指示である。したがってすべて「那」系に対応している。

5.6. ア—这

(46) 中国の時代劇で, 男女2人がにぎやかな街の広場を歩いている。と, 突然人を押し退けて, 馬にまたがった立派な武人が広場の中心に進み出る。群衆は皆この武人を遠まきに眺めている。2人も人垣の後ろから眺めながら, 女が傍らの男にささやく。

—哎!这是谁?

(ねえ, あの人誰?)

(牧野 1993: 101)

(46) の「这」は「馬にまたがった立派な武人」を指している。二人は街の広場で武人を見

たばかりで、それが新しい情報として二人の頭に残されている。発話の場で得られた情報であるから、短期記憶である。また、これはすでに現場に存在していないから直示とはいえない。話し手の意識の中では、指示対象がすでに文脈上に提示されたと同じような状況であり、照応である。しかし、日本語の「ア」は直示であると考えられる。すなわち、日本語は最初に直示による指示で始まると発話が終了するまで直示が保持される。一方、中国語は直示で始まっても途中で照応に転換することができるのである。もちろん中国語の「这」を「那」に置き換えれば、「那」は談話効果として、指示対象を時間的、空間的、心理的に遠ざけたい（忌み嫌う）気持ちを示しうる。この点を次のようにまとめておく。

※ 直示・照応の転換原理：中国語の指示は直示から照応に転換できる。日本語の指示は直示から照応に転換できない。

(47) 他的车，几年的血汗挣出来的那辆车，没了！自从一拉到营盘里就不见了！以前的一切辛苦困难都可一眨眼忘掉，可是他忘不了这辆车！

（車だ、あの何年もの血と汗の結晶である車が、消えてしまったのだ。兵営に着いたとたんきえてしまったのだ。これまでの苦労くらいならさっぱり忘れることもできる。だが、あの車だけはどうしても忘れることができなかった。）（中 1990：429）

(48) 因为进城，姐弟俩细心照料的那只小狗，不得不再次被一起，所以，他们始终无法忘记名叫“鲁鲁”的这只可爱的小狗。

（上京のため、姉と弟は細心の注意を払って世話をしていたあの小犬を再度捨てざるを得なかった。だから、彼らはいつまでも「魯魯」というあのかわいい小犬が忘れられなかった。）

(47) の「那辆车」から「这辆车」に、(48) の「那只小狗」から「这只小狗」に換えたのは長期記憶指示から短期記憶に転換したことを表している。日本語は長期記憶の「ア」から始まると最後まで「ア」を一貫して用いるのが原則として無標選択であるのに対して、中国語では最初は長期記憶指示から始まっても容易に短期記憶に転換できるのが特徴である。転換を行うことで、話し手が指示対象に感情的に近くなり、これを積極的に取り上げる意識が見られるのである。この点は、以下のようにまとめることができる。

※ 長期記憶・短期記憶の転換原理：中国語は長期記憶内の情報から短期記憶内の情報にマークを変更できる。日本語は長期記憶内の情報から短期記憶内の情報にマークを変更できない。

(49) チンピラの郭が周の息子を家から追い出して、頼に

郭： 你放心吧！这小子再也不敢来了。

(安心しなさい、あいつはもう二度と来ないぜ。)

(牧野 1993 : 105)

この例の中国語では、チンピラの郭が周の息子を家から追い出したばかりで、それが新しい情報として二人の頭に残されたままである。発話の場で得られた情報であるから、短期記憶であり、したがって「这」を用いている。日本語で同じことを述べると、チンピラの郭が周の息子を家から追い出したばかりだが、立ち去った時点で出来事が二つの場面として分離して解釈される。直前でおきたことでも過去であるから、この情報はすでに長期記憶に収めている。したがって、アに訳すことになる。日本語の指示詞と中国語の指示詞の違いは両言語の認識システムが違うことに起因する。日本語の指示詞の照応用法は長期記憶に収蔵するのが早い。ここでは終わった事を重視しているから過去で、長期記憶の中の情報として扱われることになる。中国語の指示詞の照応用法は終わったことでも新しい情報なのでそのまま短期記憶に収蔵されており、中国語は短期記憶に収めておく時間が相対的に長いと言える。この点は、以下のよう

※ 中国語の指示詞は二対立で制約が小さく、自由度が高くてゆるい。それに対して、日本語の指示詞は三対立で制約が大きいために、混乱を回避する上で一貫性を保持しなければならない。

6. まとめ

以上、本稿では日本語と中国語の指示詞の照応用法に関し比較対照をおこなった。それにより以下の点があきらかになった。コと「这」は対応しているのに対してコと「那」は対応していない。ソと「这」は短期記憶の中の情報を指し示しているから、対応している。ソと「那」も対応しているが、空間的、時間的に話し手の指示の現場から離れている過去や未来という時間、あるいは場所である場合は中国語では「那」を使う。長期記憶であるアはおおよそ中国語の長期記憶の「那」と対応している。また、日本語は長期記憶のアから始まると最後までアを一貫して用いるのが原則として無標の選択であるのに対して、中国語は最初は長期記憶指示から始まっても、次には容易に短期記憶に転換できるのが普通である。さらに、中国語は長期記憶内の情報から短期記憶内の情報にマークを変更できるが、日本語は長期記憶内の情報から短期記憶内の情報にマークを変更できないのである。

注

本稿は、芦（平成16年度富山大学大学院人文科学研究科言語学専攻修了）が呉人、加藤との共同研究のもとに、日本語指示詞の照応用法に関して、語用論ならびに中国語との比較対照の観点を通じて再検討し直した試みである。

参考文献

- 加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』（研究社）
- 金水敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『指示詞』（ひつじ書房）（再録），123－149.
- 久野暲（1973）「コ・ソ・ア」『指示詞』（ひつじ書房）（再録），69－73.
- 久保田美子他（1994）『日語入門』（アルク）
- 黒田成幸（1979）「（コ）・ソ・アについて」『指示詞』（ひつじ書房）（再録），91-104.
- 佐久間鼎（1983）『現代日本語の表現と語法』（くろしお出版）
- 讃井唯允（1988）「中国語指示代名詞の語用論的再検討」『東京都立大学人文学報』198，1－19.
- スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）
- 田窪行則・金水敏（2000）「複数の心的領域による談話管理」坂原茂（編）『認知言語学の発展』（ひつじ書房），251－280.
- 堤良一（2002）「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』122（日本言語学会），45-78.
- 中みき子（1990）「指示詞（コ・ソ）・アと「这」が対応する時」『京都外国語大学論叢』，425－432.
- 牧野美奈子（1993）「中国語の指示詞とテキスト」『中国語学』240，99－108.
- 望月八十吉（1974）『中国語と日本語』（光生館）
- 吉本啓（1986）「日本語の指示詞コソアの体系」『指示詞』（ひつじ書房）（再録），105－121.
- 吉田集而（1980）「指示詞に見られる空間文割類型とその普遍性」『国立民族学博物館研究報告』5巻4号
- 王力（1945）『中国語法理論』（中華書局）
- 江天（1980）『現代汉语语法通解』（辽宁人民出版社）
- 刘月华・潘文娒・顾韦华（1996）『現代中国語文法総覧』（くろしお出版）
- 梁慧（1986）「『コ・ソ・ア』と『这・那』—日本語・中国語の比較対照研究—」『都立大学方言学会会報』116，9－18.
- 林祥楣（1987）『汉语知识讲话3』（上海教育出版社）
- 人民教育出版社・光村図書出版（1988）『中日交流標準日本語初級』（人民教育出版社）

資料

- 片山恭一（2001）『世界の中心で愛をさけぶ』（小学館）
- 夏目漱石（1970）『三四郎』（岩波書店）
- 三浦綾子（1982）『氷点』（角川書店）